

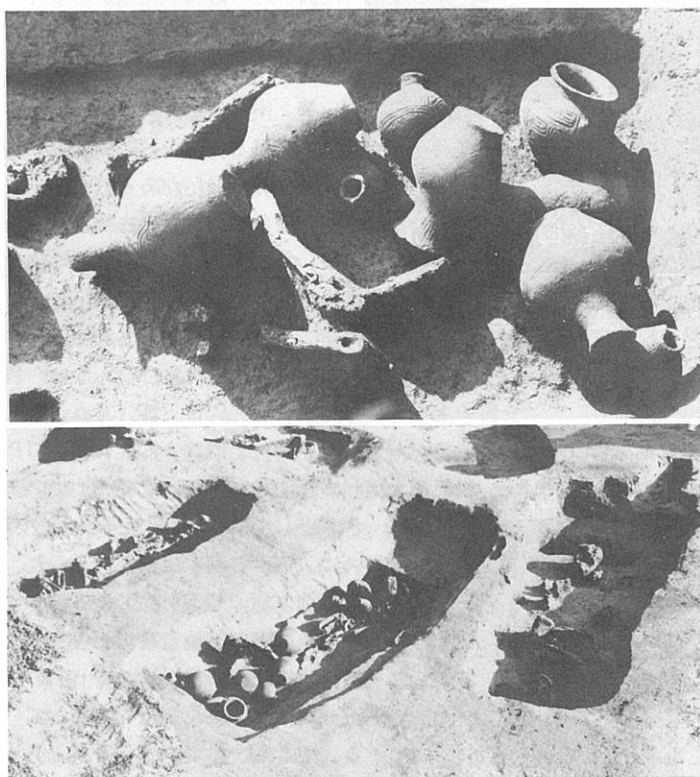
長野県埋蔵文化財ニュース

No. 18

1986.10.30

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩筑調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



↑ 19号木棺墓全景
↘ 21号木棺墓遺物出土状態
← 第Ⅲ墓墳群

弥生中期の墓墳を多出した

しおぎき 塩崎遺跡群(市道松節・小田井神社地点遺跡)の調査

長野市立博物館 矢口 忠良

調査地: 長野市篠ノ井伊勢宮・一本木・中条・松節

調査原因: 市道越一上町線道路拡幅事業(2,754㎡)

立地: 千曲川右岸の自然堤防上にあり、中条地籍での標高は358.2mを測る。また自然堤防と後背湿地との比高差は数10cmにすぎないが、東縁での旧河川路との差は2m以上に及ぶ。

検出遺構・遺物: 番号を付した遺構は、住居址192軒・土壇墓(木棺墓含)31基・土壇(井戸址含)113基・ファイアーピット3ヶ所・溝址33ヶ所・集石址1ヶ所である。これらは弥生時代から平安時代の所産で、それぞれ複合関係にある。中でも注目されるのは、栗

林式期以前の住居址及び土壇を伴う木棺墓群と付随する土器群をあげることができよう。住居址は5m内外の円形を呈し、主柱穴は壁際に6個～8個、中央に径55cmの地床炉があり、一部に周溝が伴う。該期における住居址全面の露呈は初見である。次に木棺墓はV群に分けたが、その広がりについては不明である。また主軸方向も一定でなく、土壇墓が混入したり、重複関係もある。埋葬方法は屈肢葬であるが、埋納人骨は1～3体まであり、また副葬品も一様でなく、今後の課題を多く残している。この他古墳時代住居址床面より内行花文鏡が出土したことは特筆に値する。

埋蔵文化財施設紹介



箕輪町郷土博物館

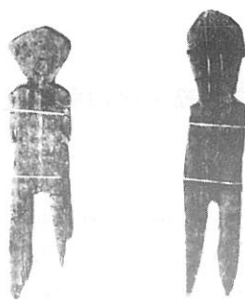
【概要】箕輪町は長野県の南部、伊那谷の咽喉の位置にあり、人口は約22,000人、農業・商工業を主幹産業とする。山紫水明の立地条件を整えた町である。加えて、古代からの各種文化財に恵まれ、その出土品等も多数見ることができる。また、多くの芸術家も輩出し、その作品も優れたものが残されている。これらのものを一堂に観賞する場所が必要であり、資料の収集保存・展示・研究等の機能を備えたものとして郷土博物館建設が計画されたのである。

昭和48年10月に着工し、翌49年7月に竣工した「箕輪町郷土博物館」は、ALC構造、二階建て延床面積が688.98㎡あり、空調・換気設備等を完備した建物である。一階に民俗展示室・自然展示室・事務室・会議室・収蔵庫を配置している。二階は考古歴史展示室・美術室・荷解室・収蔵庫となっている。

博物館前庭には、昭和57年度に発掘調査を実施した「天王塚古墳」を移転復元し、児童・生徒の学習に役立たせている。また、日本で一台限りとなった19型の電気機関車も保存され、長くその雄姿を留めている。

49年11月開館以来12年目を迎えようとしている。年1回以上の特別展と各種学習会を館活動の中心としているが、毎年続いている埋蔵文化財の発掘調査は、本来の館活動を圧迫し、資料整理・調査追及の遅れに、拍車をかけている。

ら数多く出土した遺物が見られる。毎年実施している埋蔵文化財の発掘調査によって、その出土遺物は増すばかりであり、収納施設を考えなければならない。展示資料の主なものとして、有孔罽付土器（写真上）と木製品遺物がある。有孔罽付土器は、器高48cm、口径34cm、胴部最大径49cmを測り、推定容量45.9ℓで、大



有孔罽付土器(上)と人形(下)

きさとしては全国的にも最大のクラスに入る。曾利Ⅰ時期と考えられ、最盛期末期の超大形品である。木製品遺物は町内箕輪遺跡出土のもので、古代水田址と農耕（米づくり）の状況を知る上で貴重な遺物となっている。中でも、木製人形（写真下）・馬形は当時の人々の信仰の様子や、都との係わりを示す遺物として重要視されている。

第4室の美術部門では、郷土の作家の作品展を続けている。

以上、展示の概要を記したが、展示資料はすべて町内のもの（町内の出土遺物、町内から借用したもの等）とするなど郷土博物館としての特色を保ちながら、地域と密着した博物館活動が心かけている。

所在地	上伊那郡箕輪町松原 (0265)79-4860
休館日	毎週月曜日・祝日、12月29日～1月3日
入館料	大人 100円 小中学生 50円
交通	飯田線伊那松島駅下車 西へ徒歩10分
	〈学芸員 柴 登己夫〉

佐久地区(関越自動車道上越線)の発掘調査開始

佐久地区の発掘調査にあたって

副理事長 高橋弘典

高速交通網の整備促進早期建設は県民の長い間の悲願とされておりましたが関係する皆様方のご尽力によりまして順調に進展しておりますことは誠に喜ばしい限りです。当埋蔵文化財センターの中央自動車道長野線にかかわる発掘調査も計画どおり進行しておりますが、かねてから予定されていた「関越自動車道上越線」につきまして、いよいよ佐久市の一部について発掘調査が可能となりましたので、10月1日から「佐久調査事務所」を新たに開設し対応することになりました。対象調査地区は佐久市を通過する11.9kmと発表されていますが、この地区の包蔵遺跡数は26ヶ所、約29万㎡といわれています。本年度は調査面積6千㎡を予定して10月6日現地において地域関係者の方々にお集りい



栗毛坂遺跡現場での掘入式

ただき発掘調査の掘入式を行ったところです。

明年以降については調査可能面積の確定をまって対応することになりますが、総勢30名前後で運営される予定です。

今後の発掘調査が順調にしかも安全に進められるよう関係の皆様のご支援ご協力を賜りますようお願いいたします。

佐久地区の遺跡の状況

調査第2部長 丸山徹一郎

関越自動車道上越線の建設に係る佐久市内の諸遺跡は、香坂谷の山麓の遺跡、平尾富士の西山麓の遺跡、湯川の兩岸の段丘上の遺跡の3つに大きく区分することができます。

香坂谷の遺跡は縄文時代と平安時代の集落址が予想されますが、あまり大きな遺跡はないようです。平尾富士の山麓には、塚原・丸山・一本松などの古墳群が存在しています。関越自動車道は古墳群の南端を横断します。現在、路線内には古墳はないが、封土剥平の

古墳が検出される可能性はあります。湯川の兩岸段丘上には、西大久保・東大久保・腰巻（以上左岸、平根地区）、栗毛坂・枇杷坂（以上右岸、岩村田地区）などの縄文時代から平安時代の集落址の所在が予想される大きな遺跡群が分布しています。

10月13日より佐久インター予定地内の栗毛坂遺跡から調査が開始されましたが、いずれにしても、学術的な発掘調査がほとんど行われていない地域であり、各遺跡の状況がはっきりしていないものが多く、それだけに今後の発掘調査が期待されます。

遺跡名：1. 下茂内 2. 木戸平A 3. 吹付 4. 上中原 5. 鶴尾根A 6. 同B 7. 栗林 8. 西林 9. 干草場 10. 城の口 11. 東ねぶた 12. ねぶた城跡 13. 西ねぶた 14. 留場 15. 大里尻A 16. 同B 17. 丸山古墳群 18. 一本松古墳群 19. 北山寺 20. 東大久保 21. 西大久保 22. 腰巻 23. 栗毛坂 24. 西赤座 25. 中久保田 26. 枇杷坂



発掘調査紹介

佐久町 ^{うしろだいら} 後平遺跡南佐久郡誌刊行会 島田 恵子
考古常任編纂委員

後平遺跡は、南佐久郡佐久町大日向の抜弁川左岸、茂来山山麓の突端に形成された台地状の緩傾斜面に所在する標高880mをはかる遺跡群で、西側には横沢川の谷を隔てて縄文中期～中世にわたる館遺跡が隣接している。

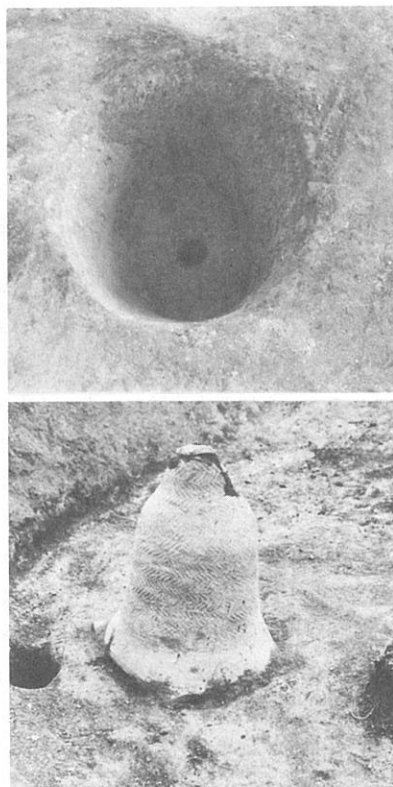
昭和59年、パイロット事業により遺跡が破壊される懸念が生じたため試掘調査を実施し、翌60年に発掘調査の運びとなった。結果、6,000㎡の調査区から縄文早期の落し穴状遺構21基、その他土壇50基、縄文前期初頭の住居址2棟が検出された。落し穴(写真上)のプランは、長方形・円形を呈し、約1m×180cm、深さ60～130cmを測り、中心に杭を打ち込んだと考えられる深さ30～50cmを測るピットが良好な状態で発見され、遺構内より動物の骨片、土器片(田戸系および条痕文系土器群)、石器等が出土している。また、テラス(70×120cm、深さ20～30cm)を有す落し穴状遺構も検出されており好資料となろう。

また、縄文前期初頭のJ1号住居址は、6m×530、深さ70cmを測る楕円形を呈し、正方形に配列した4本の主柱穴を有し、炉址は検出されず、住居址北西側の隣接地に焼土が厚く堆積した土壇状の遺構が発見された。さらに、住居址南側床面直上に器高50cmを測るほぼ完形に近い花積下層式の深鉢が逆位の状態で出土し(写真下)、付近には石皿、磨石、台石が並列していた。また、出土したその他の土器片は、早期末の条痕文系土器群が80%を占めており、時期的な面で過渡期の様相を示しているといえる。

第2次調査は、国道建設に伴い台地の後端部を本年4月～6月まで実施した。調査によって、落し穴状遺構と同時期の住居址1棟、押型文期の特殊遺構1基、縄文後期末の住居址1棟、さらに、中世の牧址に関連すると考えられる遺構が検出された。

縄文後期の住居址出土の遺物は祭祀に関わるものが多く、赤色塗彩土器、台付土器、蓋、注口土器、ミニチュア土器、耳飾り、土製かんざし等があり、中でも土製かんざしは県下においては初見であるとおもわれる。また、横刃型石器21、分胴型石斧17、磨石13が出土しており、石斧は全て分胴型であった。炉址は住居址のほぼ中心に位置し、二重の石囲いである。

また、牧址に関連すると考えられる遺構は、長さ100m、幅2～3m、深さ1m～2mを測る溝状の落込みと、角釘、はみ、土師質土器等が出土した特殊遺構2基が検出されている。付近は、楯六郎親忠の居館址、矢田義清の大涯城址が存在し、両者は木曾義仲の軍馬を飼育した私牧地であった



後平遺跡の落し穴(上)と土器出土状態(下)と伝承されている。しかし、牧址の調査例は全国的にも少なく、今回検出されたこれ等遺構の性格等は詳細に検討を要す必要があり、速断出来得ない状況にある。将来、周辺地域の調査によりこれ等遺構の性格を明らかにする機会があることを切望する。

おおに たん
長門町 大仁反遺跡

大仁反遺跡調査団 斎藤 幸恵

大仁反遺跡は小県郡長門町岩井地籍に所在し、霧ヶ峰アスピーテ(主峰車山1925m)の東麓に源を発する大門川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は710m前後を計る。

調査は長門町岩井地区の圃場整備事業に伴うものであるが、予備調査の結果にもとづいて遺跡の大半を現状保存することが決定され、さらに本調査において縄文時代中期の集落の姿を把握するといった成果をあげることができた。

予備調査は約1週間にわたり、1. 遺跡の範囲と遺物包含層の保存状態を確認する。2. 遺跡の所属時期と中心部における遺構の有無を確認する。といった目的のもとに圃場整備事業対象域の分布調査と計51ヶ所

(2×2m)の試掘を行なった。その結果東西約130m、南北約250mの広範囲におよぶ遺物の分布域と、縄文時代中期を中心とする良好な遺物の包含層、ならびに遺跡立地の基本的な地質構造を確認することができた。教育委員会、大仁反遺跡調査団、農政課では、この予備調査の結果をもとに調査期間、予算等の問題を含め、本調査の進め方について協議を重ねたが、埋蔵文化財の保存と活用という基本的な立場から整備事業の工法を変えることによって遺跡の大半を現状の姿で保存していくことに決定した。そして、本調査では遺跡の全体像を把握するといった視点から、排水路、用水路の予定地と予備調査において確認された遺構に関わる部分を発掘区として設定した。調査終了後、排水路以外の発掘区については埋め戻しを行なったが、遺跡内は盛土工法によって耕作地の平坦化、区画整備が実施されることになっている。

今回の調査面積は約1000㎡と部分的な調査であったが、中央に幅6m、長さ15mの長楕円形の集石遺構とそれに接するようにして広がる集石土壌群が確認され、さらにその周囲をほぼ半円状に住居址群がめぐるといった集落形態が予想された。住居址は計25軒確認され、そのうち15軒についての調査が終了しているが、石囲い炉の一辺(入口部側)の中央に石棒を埋設した住居址なども検出されている。この他の遺構としては河床礫を楕円形にめぐらせ、その内側に扁平な板石を敷きつめるといった配石遺構や方形の配石墓などが確認された。

各遺構の帰属時期については資料整理の途上にあるが、発掘区北東部側の住居址群においては貉沢～曾利Ⅱ式期の資料と近年着目されつつある「焼町土器」が重複する住居址の上下にわたって出土しており、北陸系統の土器や、近くでは大木式の土器も検出されている。南西部側の住居址群では、曾利Ⅱ～Ⅲ式、加曾利EⅡ～Ⅲ式期に相当する埋襲が検出されたが、加曾利E式が比較的高い割合で認められた。集石遺構、集石土壌、配石遺構等には、曾利Ⅱ～Ⅴ式、称名寺式期の土器が相伴している。

大仁反遺跡は千曲川水系の遺跡として位置づけられるが、大門川流域の遺跡としては最初の調査例となる。集落の部分的な調査ではあったが、貉沢～曾利Ⅴ、称名寺式の各期にわたる豊富な土器群、あるいは打製石斧、石皿等をはじめとした膨大な量の石器群は当地域の縄文時代中期文化研究の上で貴重な資料になるものであろう。

松本市 宮渕本村遺跡

松本市教育委員会 直井 雅尚

宮渕本村遺跡は松本市街北西の奈良井川右岸の河岸段丘上に位置し、従来、宮渕遺跡あるいは宮渕二ツ塚遺跡として知られてきた。

今回の調査は遺跡の北端部が対象となり、昭和60年6月1日～9月30日と翌年6月12日～8月9日の二次にわたり合計6000㎡の面積で実施された。発見された遺構は、住居址が弥生中～後期63軒、古墳時代後期3軒、その他古墳時代前期の方形周溝墓1基、同中期の古墳1基、土壌等で、特に弥生時代の大規模な集落址であることが判明した。

弥生時代の住居についてみると、平面プランは中期後半(栗林期)と後期後半(箱清水期)が隅丸長方形、また中期末から後期前半では楕円形が多い。炉は埋襲炉・地床炉・石囲い炉等の形態があり、住居内の位置が中期から後期にかけて、中央部から徐々に奥壁寄りの柱穴間に移っていく傾向が看取できた。

古墳は径14mの円墳で最小1.7m、最大5m以上という周溝を巡らせている。墳丘内には8.5×4mの長大な墓壇があり、内部には8体分の木棺ないしは直葬が認められ、うち7体は同時かさもなくばかなり短期間に連続して埋葬されたものと考えられる状態であった。また周溝内にも東側と南西側に2体の埋葬が認められた。

今回調査で得られた遺物は多量の弥生土器・石器・石製品および若干の土師器である。弥生土器は各遺構から多量に出土し、今後の整理により松本平の様相を究明する良好な資料となろう。石器は太形蛤刃石斧・片刃石斧・石庖丁・磨製石鏃・石槌・石錐・砥石等多種が、また石製品では数点の管玉の他、剣形の石製品



宮渕遺跡発掘調査状況



堂垣外遺跡発掘区全景

が1点出土した。弥生石器のセットとしては市内県遺跡例とともに注目されよう。

遺物の出土状態で注目されるのは、第一に昨年調査の5号住居（吉田～箱清水期）である。本址東半部からは製作途中や半乾燥段階で破損・被熱したとみられる土器片がおびただしい量で発見され、西半部床上には作業台らしい平石8点と大きな粘土塊も残されていた。このことから本址は土器製作址と推定され、全国的にも珍しい例を提供することとなった。次に、本年度調査の48号住居（栗林期）は、焼失の痕跡を残す床面上に大形砥石が2点あり、その周囲から太形蛤刃石斧・片刃石斧・石鎌・石庖丁の未研磨品が発見されて、石器製作の一端を示す良好な資料となった。

以上の成果のうち、遺構のみ昨年度分は報告書刊行済みで、本年度分も年度内刊行の予定である。また遺物についても、現在整理中なのでここ数年のうちに報告する予定である。

伊那市 どうがいと 堂垣外遺跡

伊那市教育委員会 飯塚 政美

遺跡は、天竜川の右岸の伊那山地から流出する棚沢川が平地へ出る右岸段丘上にあり、縄文晩期で著名な野口遺跡が近くにある。

本遺跡は古くから縄文中期の遺跡として周知されていたが、今回の調査の結果では該期遺物は少量、遺構も皆無といった状況で、むしろ室町時代後半が主体となった。この一帯は過去2回にわたる水田造成地域であったが、遺構の残存状況は良好であり、今後同じ条件下にある遺跡発掘調査に参考にすべき点が多いといえよう。

調査は昭和61年7月～8月にかけ約500㎡にわたり実施した。検出した遺構は隅丸方形の竪穴住居址2軒、



古瀬戸灰釉把手付水差の出土状況

方形の地下倉址2基、掘立柱建物址5～6棟、溝状遺構等である(写真上)。調査面積が狭くかつ出土遺物の分析がすすんでいないので、各遺構の配置や変遷等については今後の課題である。主な出土遺物は銭貨（咸平元宝・皇宋通宝・洪武通宝）、陶磁器片（宋青磁碗・古瀬戸天目茶碗・同灰釉平碗）、火打鉄等である。

写真右の古瀬戸灰釉把手付水差は、掘立柱建物址の柱穴らしいピットの内から、底部を上に向けて出土した。偶然に落ちこんだというより、意図的に埋めた可能性が強く感じられる状況であった。口径4.6cm、高さ8.8cm、底径5.3cmを測り、胴下部に赤色の鬼板が化粧がけされており、ほぼ完形である。器形・胎土・製作技法等から考え、中世瀬戸美濃地方編年では、窖窯期後半に位置づけられ、15世紀後半ごろの所産と推定できる。

こうした予想外の中世遺構・遺物の発見を踏まえて手良地域付近を中心とした中世の歴史的景観を復原してみると、本遺跡一帯は若干付近より小高い位置にあり、北方には春日城を眺み、居館構築には絶好の地といえる。またこの遺跡の直下には陳閑渡という字名が残っており、閑所との関係や付近の古道存在も今後究明すべき課題であろう。いずれにしろ、本遺跡付近が高遠城と福与城（箕輪町）を結ぶ交通の要所にあり、天目茶碗や宋青磁といった高級品の出土から、番所的機能をも兼ね備えた地方土豪・地侍の居館址であったと推定してよいであろう。

報告書いよいよ刊行へ：5年目に入る当センターでは今年度末をめざしていよいよ第1冊目の報告書が刊行されます。先土器時代や縄文晩期の中島A・B遺跡、縄文前期末～中期初期の良好な土器群をもつ大洞遺跡、類例少ない八花鏡を伴った墓址の大久保B遺跡など、岡谷市内の10遺跡をまとめて報告します。引きつづき明年度から塩尻市Ⅰ・Ⅱ、松本市(冊数未定)と予定しています。

埋文センター調査遺跡速報

松本市 ^{しもかん} 下神遺跡

調査研究員 小平 和夫

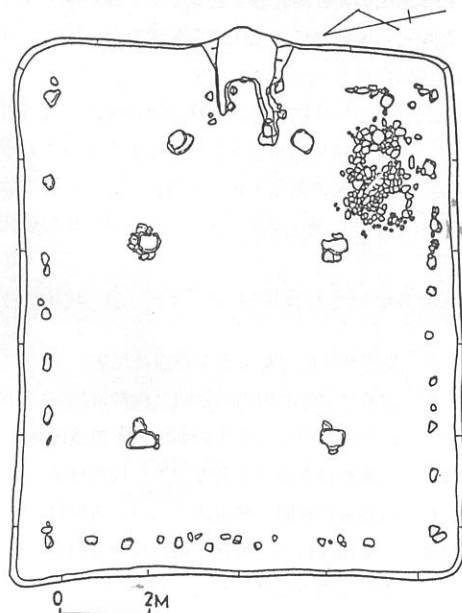
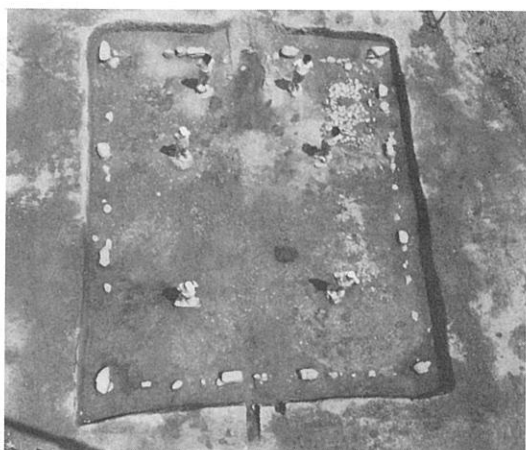
下神遺跡は松本市神林地籍に所在する。中央自動車道長野線の建設に伴う発掘調査として、昭和60年4月より61年7月まで2ヶ年にわたって調査がおこなわれた。今回調査地区の周辺は、昭和58年県営ほ場整備事業に先立つ緊急調査として、松本市教育委員会により発掘調査が行なわれ、約20,000㎡の調査区から竪穴住居址79軒、掘立柱建物址35棟、溝26基の他柵列、土壇等の遺構が検出されている。これらの遺構は平安時代前半の時期に集中して営まれたとされ、また、SKK S10号住より出土した奈良三彩小壺、SKS9号住の佐波理琏、SKMT6号住の銚帯巡方等の特殊な遺物のあり方を、調査者は集落の性格を考える上で特に注目している。

今回調査が行われた部分は、遺跡推定範囲の中央東寄りを幅50m、延長約750m(39,400㎡)にわたって南北に縦断する形となり、松本市教委の調査した範囲が東西に隣接し、両者を合わせると約60,000㎡の調査面積をこえることとなった。

松本市の調査結果から、本遺跡が平安時代前半の集落遺構であり、今回の調査でもそれにかかる多数の遺構・遺物の検出が発掘当初より予想されていたが、調査の結果は予想をはるかに越える遺構の広がりを確認することになった。竪穴住居址144軒、掘立柱建物址50棟、溝址90、柵列3の他土壇、竪穴状遺構等を多数検出した。

現在整理作業も緒に着いたばかりであり、膨大な資料を前に、遺跡の輪郭さえも描き得ない状況であるので、調査時に得られた所見をもとに、今後の整理に向けての課題を述べてみたい。

まず、遺構の分布と集落のひろがりについては、延長750mの調査範囲内に疎密をもってほぼ全面に遺構が展開している。南半部ではややうすく、北部では濃密な分布を示し、さらに北端部で無遺構となり遺跡の北限を示すと考えられるが、その中で、竪穴住居址、掘立柱建物址等が当時の自然地形に制約をうけつつ、溝等によって空間を区切るといった社会的な規制のもとに構築され集落が形成されているようにみえる点である。東西・南北の方向軸を意識した溝や柵列、建物の配置はその背後にある集団の意図を感じさせる。今後さらに遺物の分析を行ない遺構の時期区分を検討し、



礎石をもつ下神遺跡の大型住居SB97

遺構間の有機的な関連を考慮して、集落の変遷過程を解明していかなければならない。

次に遺構個々のもつ特性について触れてみたい。最少5.3㎡から最大115㎡まで平面規模の異なる竪穴住居址のあり方、柱穴の存在するものと無いもの、礎石をもつ竪穴住居址等、またカマドやピットのあり方を含めて、その構造の相違のもつ意味の検討が、集落の構造分析の基礎作業となるだろう。

特に、調査区中央部で検出されたSB97(写真・図)は、11.5m×10mの本遺跡最大の竪穴住居址である。主柱4本とカマド脇柱2本、壁際に等間隔の礎石を据えており、他の住居址とは構造的に異った様相を示している。近接する南栗遺跡、三の宮遺跡、北方遺跡などからも類例が検出されており、集落の中でのあり方が注意される。

掘立柱建物は50棟検出されているが、それぞれのものつ機能を検討していくこと、これも最初の課題に直結する問題であろう。

第三に特殊な遺物を列挙してみよう。今回の調査で、万年通宝・神功開宝の銭貨、銚帯(巡方)、円面硯・転用硯等の陶硯類、「風」など何種類かの墨書土器が出土している。わけても、平安時代の文献に記載されている「信濃国蘇我郷草茂庄」に関連するであろう「草茂」の墨書土師器片が出土した点は注目され、松本市教委調査で検出された三彩小壺・佐波理琬等と合わせてこの集落のものつ性格を物語るものといえよう。

松本地区の発掘調査終了近づく：一部59年から開始された中央道関連の松本地区の発掘調査もようやく終了寸前の段階にいたった。

奈良井川と梓川に挟まれた約10kmの間に、計11遺跡があり、調査面積が約28万㎡という広大なものであった。現在、島内地区の北方・北中2遺跡のわずかな部分を残すのみとなったが、発掘された主な遺構―住居址約990

昭和59年度から61年度にかけて、長野県埋文センターが調査した中央道長野線用地内の遺跡は、松本地域で10遺跡約28万㎡に及び、ほとんどが古代から中世・近世にかけての集落遺跡であった。この一連の成果と、近年松本市教委が精力的にすすめている松本市西部地域の調査成果の総合の上に松本平の古代史像が描けると考えられる。そのためには遺構・遺物内容の統一的な検討がまずその基礎的操作として重要であろう。それらの総括が古墳時代から奈良・平安時代・中世に至る歴史の流れの中で、下神遺跡の占める位置が自ずと明確になってくるであろう。

軒、掘立柱建物址 370 棟等―だけ取り出しても、この調査がいかに大変なものであったかが理解できよう。

別稿下神遺跡の大型住居例のその後の増加、三の宮遺跡出土の須恵器高台杯内面底に線刻された女性上半身像、二重の堀をめぐらす北栗遺跡の中世屋敷址など、個々の新発見もさることながら、松本市西郊に展開するこれら古代～中世集落の総合的分析こそ今後の課題であろう。

埋文センター日誌抄(昭和61年7月～10月)

- 7月1日 松本盲学校児童7名下神遺跡見学
- 〃 2日 市町村文化財担当者会議(長野市) 3名出席
松本市開明小6年生約200名下神遺跡見学
- 〃 14日 信濃教育会役員5名センター視察見学
- 〃 17日 信濃毎日新聞下神遺跡の大型住居取材
- 〃 20日 松本地区島立・神林4遺跡現地説明会。小雨ながら県内外より約200名の参加者
佐久市文化財関係者30名センター視察見学
- 〃 21日 松本市島内北方遺跡発掘調査開始
- 〃 24日 大町市教委遺跡調査団17名下神遺跡見学
- 〃 26日 松本市二子小教職員26名下神遺跡見学
- 〃 30日 佐久香坂地区の確認調査開始(8.1まで)
- 8月4日 豊科町上手木戸遺跡調査開始
- 〃 5日 信濃学園教職員40名北栗現場・センター見学
県警本部長センター・各現場視察見学
- 〃 11日 NHK北栗遺跡現場・センター取材
- 〃 12日 テレビ信州各現場取材
- 〃 13日 前奈文研所長坪井清足先生来所
- 〃 18日 奈良大泉拓良先生来所
- 〃 19日 県義務・高校教育課長各現場 センター視察
- 〃 21日 文化課・高連道・公団との調整会議
- 〃 22日 長野県遺跡調査指導委員会(松本合庁)
- 〃 23日 奈文研埋文センター長田中琢先生講演会
永峯光一・戸沢充則・林茂樹先生来所

- 8月26日 松本市島内北中遺跡地権者説明会 5名出席
- 〃 30日 奈良大水野正好先生来所
- 9月4日 豊科南小6年生170名上手木戸遺跡見学
- 〃 8日 豊科東小6年生70名上手木戸遺跡見学
- 〃 9日 豊科町上手木戸遺跡調査終了
- 〃 11日 埋文協全国研修会(館山市) 3名出席
松本市島内小6年生120名北方遺跡見学
- 〃 17日 関プロ臨時主管課長等会議(東京) 2名出席
- 〃 18日 松本市島内北中遺跡発掘調査開始
第11回理事会(長野市) 佐久調査を議す
横須賀市立人文博物館大塚真弘氏来所
- 〃 20日 宮崎大藤原宏志先生来所
- 〃 30日 北栗遺跡発掘調査終了
- 10月1日 北方・北中遺跡でプラント・オパール調査
佐久地区調査事務所発足(6名配置)・同現地
関係者への説明会 3名出席
- 〃 4日 大町高校関賢司先生中島A遺跡の件で来所
- 〃 6日 佐久市栗毛坂遺跡鍬入式 参加者約30名
- 〃 9日 南栗遺跡発掘調査終了
- 〃 10日 佐久市栗毛坂遺跡発掘開始式
- 〃 12日 北方遺跡現地説明会約120名参加
- 〃 15日 TSB北方遺跡取材
- 〃 17日 松本市高齢者文化財指導者研修会20名北方遺跡
現場見学
- 〃 20日 信濃史学会小穴芳実先生三の宮遺跡等視察
- 〃 24日 埋文協法人連絡協議会(東京都) 3名出席